

合同

No. 480

「イエス・キリストのとりなし」

板橋教会牧師

臼田尚樹



『成し遂げられた』

(ヨハネによる福音書19章30節)。

今から一年前、板橋教会に赴任して初めての礼拝は棕櫚の主日でした。礼拝において就任式が行われ、その後に取り次いだみ言葉はルカによる福音書23章32～43節から「十字架におけるとりなし」でした。そして、この一年間を主が守り導いてくださったことを覚えて感謝の他はありません。

今から42年前の棕櫚の主日、わたしは清水ヶ丘教会の洗礼準備会に出ていました。そして、翌週のイースターに受洗の恵みにあずかりました。旧会堂の床にひざまずき、倉持芳雄牧師から洗礼を受けたとき、熱いものが胸に込み上げてきて、涙が溢れました。それから今日に至るまで、主は常に真実であられ、み言葉の通りに導いてくださいました。順境のときのみならず、苦しいときも、弱さを覚えるときも、主の約束は常に真実で変わることがありませんでした。そして今、改めて思うのです。それは、何よりも「十字架におけるとりなし」に象徴される「イエス様のとりなし」によったのだと。取るに足りないわたしの祈りを聖霊がとりなしてくださり、それを瞬時に受けてイエス様が父なる神にとりなしてくださったゆえです。

三位一体の神である父なる神がみ子を捨てることは決してありません。しかし神は、罪人の身代わりとなるために人間となられたみ子イエスを、十字架の上で罪のいけにえとして捨てられました。ですからみ子イエスは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(マタイによる福音書27章46節)と大声で叫ばれました。イエスの究極のとりなしがここにあります。罪に対する神の裁きであるみ怒りが人となられた(罪のない)イエスの上にすべて注がれたのです。そして、イエスは「成し遂げられた」(第6言)と勝利の声を発せられました。「成し遂げられた」はギリシャ語で「テレスタイ」と言い、3人称単数の現在完了受動態です。元々は商業用語で「支払い完了」という意味です。わずかでも負債があれば「テ

レスタイ」とは言えません。それは「完済した」という意味で、単なる過去形ではなく現在完了形で語りかけています。過去、現在、未来において、その都度、わたしたちがイエス様を信じる瞬間である「今」に語りかけているのです。「あなたの罪の負債はすべて支払われた」と。イエスは完全に罪を負ったのです。

マタイとマルコではイエスが息を引き取った後に神殿の垂れ幕が裂けますが、ルカによる福音書では、イエスが最後の第7言を大声で叫ぶ前に「神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた」(23章45節)と記しています。つまりルカによれば、イエスが「成し遂げられた」と言ったときに、神殿の垂れ幕が真ん中から神によって裂かれたのです。それほど、イエスの十字架におけるとりなしは完璧でした。「神殿の垂れ幕」とは、神殿の最も内奥、神の臨在の場である至聖所に入るのを隔てた幕のことです。しかし今、イエス・キリストを信じる者は、誰でも、神の臨在へと招かれています。

毎聖日の公同礼拝には、まさに、垂れ幕はありません。礼拝は神の招き(招詞)によって始まります。神がわたしたち一人ひとりを招いているのです。ですから、礼拝には神の臨在が必ずあります。わたしたちは神のみ言葉に触れ、聖霊に導かれ、言葉では表現できない神の臨在へ入っていくのです。そこには永遠の楽しみと喜びがあります。そして聖餐にあずかり、神によって派遣されていきます。神を礼拝すること、これは人間にとって最高の喜びです。理屈では説明できない喜びです。

実は、この原稿を書きながら牧師室でルカによる福音書23章43節(イエスのとりなし、十字架の隣の犯罪人)を黙想していました。「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」まさにそのときに一通の手紙が、刑務所で現在服役中の人から板橋教会内アパ・ルーム日本委員会に届きました。わたしは魂が震えて差出人のために祈り始めました。「聖霊がとりなして、この方を助けてください。イエス様がとりなしてこの方を救ってください」と。教会の住所に手紙を送ったのですから、この方も公同の教会に入ろうとしているのです。

わたしたちが救われて、垂れ幕のない公同礼拝へ導かれるのは、ただ、イエス・キリストのとりなしのゆえです。そして「成し遂げられた」との勝利の宣言が、わたしたちをイースターの恵みへ向かわせるのです。ハレルヤ!